

## 恩師千葉徳爾先生を偲ぶ



撮影年月日：1988.10.13 撮影場所：東京ガーデンプレイス（石井 實 撮影）

千葉徳爾先生は平成13年11月6日午後7時30分、85歳の生涯を閉じられた。ご葬儀には菊地利夫先生が代表して参列され、菊地先生から、安らかな最期であったとお聞きしている。12日夕刊の訃報欄で知った我々は、柏市若柴の長楽寺でお別れを申し上げた。地理学・民俗学の発展に大きな足跡を残され、また多くの弟子を育て上げられた先生の学恩に感謝を申し上げ、心より千葉徳爾先生のご冥福を祈りたい。

千葉先生は大正5年（1916）千葉県にお生まれになるとすぐに東京へ転居され、旧制東京府立第五中学校（現、都立小石川高校）を卒業された。東京高等師範学校文科4部（現、筑波大学）に進まれ、昭和14年（1939）に卒業とともに宮崎県宮崎中学校に赴任された。1年足らずの間に徴兵され、ロシアとの国境に近い中国東北部の大興安嶺で軍役に服し、

終戦後もしばらく抑留を余儀なくされた。帰国後は柳田國男に師事し、23年に財団法人民俗学研究所所員となる。翌年、東京高等師範学校助教授、26年には新制の東京教育大学助手、29年に信州大学助教授となられ、はげ山の研究で30年に東北大学より理学博士を授与された。40年に愛知大学教授、49年には民俗学の教授として筑波大学に着任され、51年には東京教育大学より狩猟伝承の研究で文学博士を授与された。54年には明治大学教授に就任され、62年に退職された。その後も兼任講師、千葉県立中央博物館客員研究員などをされながら、亡くなられる半年前まで執筆活動を続けられていた。まさに、最後まで研究に邁進された人生であったといえよう。

先生の御業績の数々は広く知られるところであるので、親しくご指導をいただいた弟子の一人として、教育者としての先生のお人柄

を紹介させていただきたい。私事になり恐縮であるが、教育者千葉徳爾先生の実像をご紹介するには私は格好の事例であり、ご寛容をいただきたい。

開学したばかりの筑波大学は交通の便が悪く、陸の孤島であった。当時、我孫子市から通勤されていた先生は週1回私の部屋に泊まれた。私が3・4年の時である。「先生、床は堅いのでベッドでどうぞ」と申し上げても、「君の部屋なのだから、君がベッドに寝たまえ」といわれ、ご持参の寝袋で泊まり続けられた。寝物語に語られた戦争体験、幼い頃の思い出、フィールドでの出来事、そして恋愛談義の数々は今でも忘れられない。とくに戦争体験は、『切腹の話』などに記されているように、気持ちの優しい先生にとって死とは何か、性とは何かを考える契機となった。

2年生の春休みから卒業するまで、春・夏・冬と先生の調査に同行させていただいた。伊豆諸島、奄美諸島、北九州、白山、群馬や新潟の山村など、お供した数は私が一番多かったであろう。奄美では人口の調査をする予定であったが、みやげ物屋のハブを見たとき、保健所へ行こうといわれた。訳もわからずカルテを写し取り、さとうきび畑でハブの聞き取りをした。「人口調査ではなかったのですか」とお聞きすると、「フィールドに出るときは2つ3つテーマを用意しておくものだよ」といわれた。新潟県下田村でのマタギ調査は同級生の岩本通弥氏とお供をした。熊狩りの前夜、マタギ衆はお籠もりをして精進潔斎をする。その夜の出来事は私を歴史地理学へと進ませた。

先生の聞き取りは、両手を合わせてはにか

むような仕草をされながら、話者の話を必ず自分の言葉で言い直された。「君もやってみたまえ」といわれて聞き取りしても、どこが悪いとは指摘されない。仕方がないので、先生の物まねをした。先生はまたたいへん健脚で、追いつがる私を尻目に、地形や植物などを人間との関わりの中で語り、フィールドでの目のつけどころを示される。その博学ぶりに、私たち学生は「歩く百科事典」とあだ名を付けたほどであった。

菊地利夫先生の着任によって歴史地理のコースができ、はじめてのたった一人の4年生となった私は、両先生による2対1のゼミを受けた。毎週の発表はさすがにこたえたが、行き詰まると菊地先生か千葉先生のどちらかがフィールドに同行してくださった。千葉先生は「指導するのだから、学生さんのフィールドをみておくのは当然だよ」といわれ、気軽に調査の手本を示してくださった。大学院進学の時も、わざわざ実家まで足を運んで両親を説得してくださった。先生は優しい眼差しで学生の疑問に耳を傾けられ、丁寧にアドバイスをされる。ゆっくりした語り口に引き込まれ、知的好奇心が湧き上がり、いつしか先生のような研究者になりたいと思うようになった。千葉先生に憧れて研究者の道を選んだ同級生や後輩も、また同じ気持ちであったろう。

先生に遠く及ばない自分に忸怩たる思いを抱きながら、研究者への道を切り開いてくださった千葉徳爾先生に心から感謝を申し上げ、ささやかながら紙碑とさせていただきます。先生、安らかに眠り下さい。

(小野寺淳)